

ゴットフリート・ベンの散文「脳髓」

尾 関 種 雄

〈言葉で偽ることができると思ふなら、それがここで行われていると思うかもしれない。〉

このエピグラフの中では言葉に本質的に内在している真実を裏返し、その偽欺的な行為の信仰性についての問いであり、〈ここ〉での行なわれの宣告でもある。言葉は〈ここ〉という確実な場所で偽りの様相を呈す。そしていつも「ここ」に目を鋭く光らせなければならず、そこから言葉の信憑性が恢復されるのではないだろうか。同時に、そのエピグラフにはまぎれもないゴットフリート・ベンの言葉を使用するペンタゴ的な表白。言葉を使用することは同時に人間のエスプリの核を隠蔽する技術。その始原となるものが言葉の存在性である。初めに言葉ありき。言葉が初めにあったとは、驚くべきであり、私をいろいろと考えさせる。アニミズムとトーテミズムと洞窟掘りと動物たちと魔法の仮面と法杖、これらが世界を支配して譲らなかったこの世の初めにである。ユダヤ人たちが言葉を発したときは、おそらく彼等はすっかり老成していて、多くのことを知っていたのだろう。事実言葉の中に大地は凝集する。言葉ほど陰険で背信的なものはない。専門学者達や深遠な哲学者達までが、自由な言葉に向かうと、突如どんな態度をとったか、歴史的に保証された外的観察に基づく長台詞や体系や事実内容をもたない言葉、つまり注釈ではなく、形態そのものである言葉に対したとき、彼らがどんな処置をとるのか、これはベンにはいつもひどく興味を呼ぶ考察の対象であった。そのときの彼らの処置は完全な破産！そこでの彼等は矮小な牧歌詩人、蟋蟀、小僧の域をでない。始めに、中途に、そして終りに言葉はある。ベンが言葉に対するこのようなアイロニーは人間の歴史の始原にむけられているといっても過言ではない。言葉をめぐっての不可解さの要因は恐らくそこに内在するのではなからうか。言葉の信憑性の意味が次第に疑われていくその只中の瞬間において、我々は我々の存在の危機を鋭敏に知悉する。言葉の欺瞞性がゴットフリート・ベンに内在すればするほど、彼の赤い舌から吐き出された言葉が自己を逆襲する。言葉はひねくれた、歪んだ正体を暴露。

言葉の貯蔵は「脳髓」に存在し、そこからさまざまなジツアチオンを提供する。またベンの哲学を端的に物語っている。ベンは次のごとく云っている。「私の念願とするところは、たえず一つの明確な方向をみざすことであるがゆえに二つの概念、つまり漸層的脳髓進化現象とニヒリズムという概念をめぐってなされている形をとっている。この二つに更にいくつかの箇所を構成的精神という概念が対置されるが、これは前記二概念から生み出される無気力な嗜眠病的諸潮流に立ち向かおうとする気力に満ちた実験的試みの表現である。私は自問する、すべてを科学的に定

義して行こうとする世界像に対して、我々は今なお創造的自由をもつ自我を主張しうるのか」と。そしてベンはその漸進的脳髓進化現象についてさらに分析する。

この漸進的脳髓進化現象という概念は人類学と脳髓研究の結合から生まれたもので、ウィーンの神経学者フォン・エコノモによって提唱されたものである。彼のいうところによれば、人類は歴史の経過の中で、知性化、つまり脳髓化をたえず進めて来ていて、これは明確に認められるという。この考えの生物学的有機的根拠はベン「個性の構築」(1932年)において詳述し、彼はそれにパースペクティブを与えた。心理学的に見れば、これは自我の冷却化と名づけるもので、情緒から概念への方向に符合するわけだが、それについてベンはアカデミー会員就任講演(1932年)に、いくつかの特徴的細目を取りあげられている。

〈もうずいぶん長いことぼくは生きた。ところが何もかも沈んで消えている。ぼくというものが始まったとき、そのぼくはそのまま変わらずにいたのだろうか。〉

若い医師レンネ。戦時にも平時にも、前線にあっても後方勤務についていても、将校としても、閣屋の間でも閣下達の間でも、ゴム張りの癲癩病室の前でも監房の前でも、ベッドのそばでも、棺桶のそばでも、勝利の時でも、敗北の時でも、この現実には存在しないという夢幻状態が、彼から離れなかった。彼は一種の内的な精神集中を始めた。つまり秘密の領域を掘り起こし始めた。すると個人的なものは沈み、根源の層が立ち現われてきた。陶然とさまざまな形象に溢れ、不安に戦きつつ。それは周期的に起こり、次第に強まってきて、ブリュセルでの1915、16年には異常なまでに高まった。この時レンネと名づける一人の医師像が生まれ出た。この男は個々の事物によって自らを鞭打つ苦行者、いわば諸事実の真空状態ともいえ、いかなる現実にも耐えることができず、いかなる現実をも捉えず、ただ自我と個性のリズミカルな開放と閉鎖の交替だけしか知らず、内的存在の絶えざる非連続を知るのみの男であり、無条件に神話とその形象を信ずる人間なのである。

レンネのこのようなモノローグは同時にゴットフリート・ベンの吐きでもある。主人公と作者の関係は緻密な糸によってしっかり結ばれ、時にはお互い離れ乍らなおかつ一つのアイデンティティを保持する。

〈生きた〉と〈沈んで消えている〉という二つのパラドックスがレンネの人生の不条理さというものを克明に語っているのではなかろうか。人生の虚無とあえてそのように表現するならば、人間はいつかは〈沈んで消えていく〉運命にある。その有限的な状況に投げ出されている自己。レンネが〈生きた〉と実感することはすでもはや〈沈んで消えていく〉存在であることを自ら告知する。〈生きる〉ことは呼吸しつつ、軀が運動し、精神の遊飛を意味する。どこかが躍動し、生き生きしている存在それ自体の運動論。決して一定のところでは留まることなく、あっちこっち

へと動き、ふらふらしながら〈生きて〉いく。人間が最っとも素晴らしく照射される瞬間である。

それに反し〈沈む〉ことは死への下降であり、デスペレートな落ち込みようであり、生命の傾きを意味し〈消えて〉いくことによって更に現実的に露現されている。あるもの・形のあるものが抹殺され、その実体が消滅することによって人間の人生の終末を告げる。レンネのそのためらいがちの、あるいはためらいのないモノローグは自己自身の終末を垣間見る。人生の始まりというものから、それへの終末に至るまでの時間は短いし長いともいえる。だがそれ以上にその間の人生は様々なバリエーションに色どられるはずである。レンネがしばしば述懐する〈変わらずにいたのであろうか〉はまさにそれに対するアンチテーゼである。同時にベンの生命に対する普遍的な希求があらわにされている。〈変わらず〉にそのまま自己の人生が続けられることに至高の価値が見い出されるのではなかろうか。

〈ぼくにはもうわからない〉

だがしかし、レンネは自己の人生の形相の変化を十分に把握することができない。ある時は変わり、ある時はそのままである。この二つの谷間をあちこちしながらついには〈わからない〉という不可解さに圧倒されてしまった。〈わからない〉という把握できない自分の苛立ちがさらにわからなくさせている。

〈この病院では治る見込みのない患者をその事実を隠して退院させ、家族のもとへ帰るのが習わしだった。〉

〈病院〉とは傷ついた人間の生命を快癒できない場所でもあり、なんとか快癒させようとするどうしようもない所。〈病院〉にいれば死からいくらか遠ざかることもできるし死へいくらか近づくとはいえる極めて居心地の悪い場所である。〈治る見込みのない患者〉とは自ら立ち上がることができない、ある重要なものを抜き取られて、喪失した形だけの人間であろうか。手はあるが指が動かない。耳はあるが聞けない。眼はあるが見ることができない。口はあるが話すことができない。頭はあるが考えることができない。このような病いをもつ生きものをいうのであろうか。

〈死につきものの汚れとめんどうな書類の手続きを避けるためである〉

〈死につきものの汚れ〉とは一体なんであり、どのような匂いを持っているのであろうか。死だけが固有的に保持している鼻をつまむほどの、目をそむけたくなるほどの〈汚れ〉なのであろうか。死は我々生きているものにとってひどくやっかいで、手のつけられぬほどの〈汚れ〉それ自体の存在物であろうか。やがて個々の生きものたちがそのように〈汚れ〉たものに変質することを、すでに生きはじめた時点から鋭敏にも、先天的にかぎとったものの業であり、宿命でもあるのであろうか。我々のエゴイズムがそれらの点に収斂されているように思われてしかたがない。〈めんどうな書類〉とは一体どんな書類だろうか。そして、それが〈病院〉のどこかのカルテ室の書類戸棚に積みあげられ、日々それを扱うことの億劫さがその書類のめんどうさをあらわにしている。たしかに〈病院〉には〈めんどうな書類〉が実在しているにも拘らず、それを使用することを〈避け〉たがっているやっかいな人間と場所が必要だ。

〈そうした患者の一人のところへレンネは近寄って自分で調べてみた。前面には人工の穴、背面には床ずれ、その間に少しくにやくにやした肉。治療がうまくいってよかったね、と彼はいつて、重い足どりで病院を去って行くその患者を見送った。彼はこれで家へ帰るだろう、とレンネは考えた。〉

ここでゴットフリート・ベンは傷ついてぼろぼろになった人間に対して、ほとんど絶望的な行為としての〈治療〉を冷静な眼差しでとらえかえし、暖かい思いやり、なかば自分の無力を噛みしめながら、〈患者〉を見送る。〈患者〉は〈病院〉と〈医師〉から遠ざかることだけが可能で、依然として〈死〉そのものから遠ざかることは不可能である。

〈言葉で偽ることが出来ると思う者なら、それがここで行なわれていると思うかもしれない〉

この部分がエピグラフとして用いられていることの重要さが十分に読みとることが出来るのではなかろうか。真理を、または真実を〈言葉〉という道具でその実相と実体を隠蔽し、〈偽る〉ことができるとしたら、〈言葉〉それ自身にもはや原罪が潜在しているものと考えてもよいだろう。とりわけ、医師にとって〈言葉〉は薬物よりも最つとも〈治療〉に有効的なものであり、それが有効的なものであればあるほど〈言葉〉は神物になり、兇器となる。そして〈ここで〉〈行なわれ〉ているとしたら、もはや〈ここで〉ある〈病院〉はイカサマの場所であり、〈行なわれ〉ることの行為自体がペテン的なものである。レンネは医師にも拘らず、執拗にそこを見逃がすことなく凝視する。ゴットフリート・ベンのしたたかな恐ろしいほどの〈言葉〉を越えた人間に対する眼力が十分に光っている。

〈しかし、もしぼくに言葉で偽ることができるなら、ぼくはきっとここにいないだろう〉

ゴットフリート・ベンの精神の底流に澱んでいる最っとも人間的な塊と最っとも自己的な主張が、そこに表現されているように思われる。〈ここに〉いないとは〈病院〉にいないばかりか、〈生きてはいない〉ことを意味する。つまり逆にいえば〈言葉〉で〈偽る〉ことができたなら、彼の存在は存在に値いしない非存在者のままで居残る。生きた屍として。

〈なにかぼくを脳天から無力にするものがある〉

皮質＝脳髓。世界の皮質の凋悴、この市民的世界、日和見的、予防的、防腐的世界の皮膚の凋悴。この世界は荒れ狂う政治状況と権力の交替に打ちのめされたのだが、根本においては、これは西欧の存在の実体的危機から生じたものである。人間の内面はずたずたに分断されているが、外面もまた蛆虫や榴弾によって、かつてなかったほどに蝕まれてしまっている。腐りかかり、酸敗し、ガスがたまり、網棚に載っているのは、酸化し錆ついたスローガンがいくつか。神々は死んだ。十字架の神もバックスも。いや死よりももっとひどい。低劣な様式原理になっているからだ。若し人が宗教的になるなら表現は弱まる。しかし守り抜き戦いとらねばならぬもの、それが表現なのである。けだし新しい人間が生まれ出て来ているからだ。それはもはや情緒的な存在、宗教性、人文主義、宇宙的解釈としての人間ではなく、一切の衣裳をぬぎすてて形式のみを学んだ人間である。

なにもかもできなくなる。例えば足が動かない。腕を組むことができない。呼吸をすることができないとする。そして、そうさせているものが一体なんであるのかたぐりよせて考えていくうちに、その原因機能が判明した。つまり〈脳天〉である。〈脳天〉から軀のすみずみまで伝令されているいくつかの運動の子、思考の子、感情の子たちの怠惰さ、無力さが〈脳天〉に前在している。ゴットフリート・ベンの〈病因〉がまた〈脳天〉に存在している。

〈ぼくにはもう目の背後に支えがない。空間が無限に波打っている。かつては空間は一つところへ向かって流れていたのに。ぼくを支えていた脳皮質が崩壊したのだ〉

自分自身が生きつづけていたものが生きつづけられなくなった時、すでにどこかにヒビが入っていることに気づく。ふうっと〈脳天〉に鈍痛を感じると、もう生きつづけていくことはできない。自分自身の存在が崩れ去る。ゴットフリート・ベンの危機の具体化が今あらわにされた。〈脳天〉の崩壊と同時に自己の滅びを。そして次のように「脳髓」が結ばれている。

レンネはいった。ほら、この手のなかにぼくは持ったのですよ、百も千も。柔かいのもあれば堅いのもありましたが、どいつも溶けて流れそうなやつばかりでした。男のものも女ののも、ぐにゃぐにゃで血だらけでした。今はずっと自分のやつを手のなかに持っていて、ぼくになにが可能なのか、それをたえず研究しなければならないのです。若し分娩鉗子がもう少し強くこのこめかみのところを圧迫したとしたら……。若しぼくが頭のある個所をしょっちゅうなぐられたとしたら……。いったい脳はどうなっていたでしょう。ぼくはたえず峡谷から飛びたつ鳥のように飛びたとうと思いました。いまやもうぼくは外の水晶のなかに生きているのです。これでもうどうかぼくを自由に行かせてください。ぼくはまた飛んで行きます——ぼくはひどく疲れていたのです——ぼくの青いアネモネの剣をかざし——光の真昼の瀑布のなかを——南国の廃墟のなかを——砕け落ちる積雲のなかを——粉々に飛び散る額——あてもなくさまよい去るこめかみ。

尚、この論文は筆者の弟である尾関忠雄の多大なる協力を得たことをここに記す。